



人間牧場主・年輪塾々長  
若松 進一

## 頑張る地域おこし 協力隊

都市に住む人が過疎地へ移住して、地域の活性化に取り組む人たちが団体を支援する、「地域おこし協力隊」という聞きなれない言葉を私が耳にしたのは二〇〇九年頃でした。その頃から全国各地の地域づくりの現場に出かける度に、「地域おこし協力隊員」という名刺を持った人に出会い、その人たちから自治体希望すれば、一人当たり三百五十万円の特別交付税を受けて、三年間の期限付きで嘱託職員を採用できるという大まかな国の制度の説明を受けていました。

そんな制度があるんだったらうちの町にも欲しいなあと思ってい



僅かな光は比較的大規模な漁港を中心にしたまちづくりがいち早く進められていて、漁民団地や荷捌き所などの産業施設や、多目的

はなく、農業も漁業も長引く不況の影響でジリ貧状態で先が殆んど見えないのです。

た矢先の昨年、伊予市役所双海地域事務所の松本さんから、双海町もこの制度を活用していい人材を採用する予定だというので密かに大きな期待を持っていました。採用のプロセスはさて置いて昨年の七月、東京の広告代理店に二十年以上も勤務していたという富田敏さん(46)が採用され、奥さんそれに四歳の娘さんとともに家族で双海町へ赴任してきました。



まつりなどのイベントを行なっていることなどが挙げられますが、経済の活性化については色々な取り組みをしているものの、中々大きな成果が得られない状況のようです。

そんな清濁併せ持った地域にやって来て、地域おこし協力隊の富田さんが一体何をするのか、何が出来るのか、少々荷の重い感じがしていました。そこで富田さんが先ず最初にやったのは全世帯へのあいさつ回りでした。「地域の人に顔を知ってもらい認められないと何も出来ない」と毎日歩いて回りました。そして地域の集会に小まめに参加した結果、地域住民から聞いた「何も無い」という言葉とは裏腹に、「元氣な人が多かったり、人と物の未利用資源が多い」こと、「もう一押しすれば新しい何かが生まれる」ことに気付かされました。

とりあえず地域の魅力を外に発信するとかかり手段として、知名度のある下灘駅を拠点にしたことは、26年前私が下灘駅のプラットホームを舞台にしてコン

サートを開き、廃線の決まっていた海岸周りを存続させたり、夕日によるまちづくりへと発展させた手法とよく似ていますが、富田さんには私が持ち合わせていなかった、広告代理店で培った情報発信能力やプロデュース能力があるため、まだ赴任して半年だというのに地域の人を巻き込み、下灘駅をフィールドミュージアムにするべく様々な取り組みを行い、その一部は既にかなりレベルの高いところまで発展しているのです。富田さんの目線の向こうには駅前に産直市やカフェを定期的に並べる「下灘マルシェ」、「観光ツアー」などの夢が膨らんでいるようですが、はてさてこれからが正念場といったところのようです。

田舎に住む人たちは口癖のように「何もない」という言葉をよく言います。日常の暮らしの目線で見ると地域資源は潜在して見えず、何もないように見えますが、よそ者の目で見ると私に夕日の存在を気づかせたように見えるのです。要はよそ者である富田さんの目で気づいた潜在能力をいかに地域住民が主体的に顕在化する活動に仕組むかです。残念ながら田舎に住む人たちは安心と安全の上に胡坐をかき急激な変革を望まないのです。多分その傾向は今後も続くものと思われるのですが、その壁を破らねば地域の未来はないのですから、富田さんの頑張りもさ

ることながら、地域住民の意識改革こそ試さ

れているのです。  
地域おこし協力隊員として、富田さんが縁もゆかりもない下灘にやって来てから8ヶ月余りが過ぎました。先日松山で開かれた地域に飛び出す公務員全国大会に私はゲストコメンテーターとして参加し、富田さんも休日だというのに双海町下灘のじゃこ天、三歳醤油、恋しぐれなどの特産品を持参して、会場で販売していました。富田さんの姿たるやゴム長靴に作業着、それに法被に鉢巻というまるで漁師と見まがうほどの格好をして販売していました。そして各出店に与えられた3分間のスピーチを見事にこなし、存分な情報発信をしていました。全国から集った飛び出す公務員や大勢の首長さんから賞賛の拍手と声が上ががり、持参した商品もそれなりに売り上げたようです。電光掲示板を胸にぶら下げた私と二人はまさに動く広告塔、つまり背中に双海町や下灘の看板を背負って大いに気を吐きました。何よりも目を引いたのは模擬店前に飾られた、漁師さんが人間の背丈ほどもあるドテカイ鰻を持つている写真でした。模擬店の



前に集まった人たちは「このデカイ魚は何?」と矢継ぎ早の質問でした。もし私が模擬店で鰻入りのじゃこ天を販売しても、商品を売りたいという思いだけでこんなイメーτζ戦略は、考えつかなかったと感心しました。昔からいい表現ではありませんが、地域づくりにはよそ者・馬鹿者・若者の3者が必要だといわれています。田舎は得てして手つなぎの連帯を大事にする余りに、よそ者の中へ入れない風潮があります。富田さんはある意味よそ者ですが、願わくば大任を果たした後もこの地に住み続けたいといっているものの、地域のエゴが心配でなりません。富田さんの持ち前のフアイトで、私たちの町に新しい風を起こして欲しいと願っています。

よそ者と 馬鹿者加え 若者が  
まちを支える 大きな力ギに  
協力隊 ですから主役 町民と  
肝に銘じて 私も張り切る  
この夕日 綺麗と他所の 人が言う  
気づいてやった 成果絶大  
俺の町 何にもないと 口々に  
言うがあるある その気になれば  
(若松進一 笑売啖呵より)